

幕末明治の写真師列伝 第八十一回 宮下欽 その三

前述の暗箱については、朝日新聞社編『写真発明百年祭記念講演集』（東京朝日新聞社発行、大正15年）所収の小西写真専門学校教授秋山轍輔「日本における写真の沿革」に、以下のように書かれている。「（前略）處で先年この機械と全く同様の堆朱製写真機を信州松本で発見して私は驚いたことがあります、これは佐久間象山が使つてみた機械であるといふ事でした、象山は写真機を自製して使用したのであります」

色部貢編『象山先生五十年祭記念号』（松代青年会仮事務所、大正3年）所収、秋野太郎氏述「逸事数章」の、「寫眞鏡の事」に「文久三年に暗箱を名古屋商人より買取りたる事」と記述されていたが、それがこの「堆朱製写真機」と思われる。

しかしながら、この「名古屋商人」というのが何者かは不明。福井の蘭方医笠原白翁が所蔵していた堆朱製写真機には、レンズ内部に名古屋の眼鏡屋「天玉堂」の改札が残っていることから、「天玉堂」の可能性もあるかもしれない。但し、笠原白翁の堆朱製写真機の、収納用の桐箱には「メリケン式拾五番」の墨書が書かれていることから、これはアメリカ人雑貨商ラファエル・ショイヤーの取り扱っていた堆朱製写真機である。また、尾張国愛知郡前津村（名古屋市）時代の牧田屋（味田孫兵衛）製作の堆朱製写真機という可能性も考えられる。

さて、このように松代藩では佐久間象山とその門人たちが写真術の研究をしていたわけであるが、宮下欽次郎が写真に係るきっかけとなった理由の一つとして、このような状況が松代藩にあったとまずは記憶しておいて頂きたい。

宮下欽次郎は、天保8年11月25日（1837年12月22日）、松代藩城下、松代町の大島富作の二男として生まれた。この時、最初の名はどうやら大島仁之助という名であったようだ。父の大島富作は家代々、御切米五斗入式拾五表玄米五人扶持の松代藩士で、天保8年3月16日に御納戸役を任じられ、翌天保9年7月9日（1838年8月28日）に元方御金奉行となっている。大島家は文久3年12月31日（1864年2月7日）に長子の大島直之進（春水）が家督相続している。宮下欽次郎は二男ということから松代藩士、宮下翁輔の養子となり、安政5年2月2日（1858年3月16日）22歳の時に家督相続して、大島仁之助から宮下欽次郎と名を改めた。安政5年3月6日（1858年4月19日）、宮下欽次郎、御番入、養父の宮下翁輔は、これも家代々、御切米金七両式分上老人中式人下式人御扶持の松代藩士で、天保10年4月28日（1839年6月9日）、御奥支配を任じられ、天保11年6月17日（1840年7月15日）、若御前様奥支配役の藩士であった。

元治元年3月17日（1864年4月22日）、佐久間象山は、当時京都滞在中の14代将軍、家茂に促され、息子の恪二郎、門人の高麗津左右輔（後の文部大書記官、小松彰）など総勢15人の随行者を連れて上洛することになる。京都に到着したのは29日（1864年5月4日）の昼過ぎであった。これ

は一橋慶喜の意から出たものであるといわれている。象山は初め旅舎越前屋へ投宿したが、4月14日（1864年5月19日）に鴨川の西岸丸太町に家を求めてそこへ転居した。しかしながらその家が手狭であったため、更に5月16日（1864年6月19日）に鴨川べりの木屋町三条上ル大坂町の第二十八番路地奥にあった家へ転居している。

元治元年（1864年）6月、松代藩は朝廷から京都南門の警衛を命じられ、第9代藩主真田幸教は同年6月14日（1864年7月17日）に藩兵を率いて松代を出立する。入京は同年6月28日（1864年7月31日）。同年7月11日（1864年8月12日）、象山は山階宮邸に伺うも宮は参内せられて御不在だったため、その帰り、門人に会うため五条上ル寺町にある本覚寺（松代藩本陣）に立ち寄る。しかしここでも門人は不在であったことから、帰宅することにした。ところが三条上ル木屋町通りに差し掛かった際に刺客に会い非業の最後を遂げた。同年7月19日（1864年8月20日）に、京都で禁門の変が起こると、松代藩は参内して朝廷の守りについた。この時、幕府はこれを不満として、松代藩に大坂伝法川口の警衛を命じ、同時に長州征討の先鋒も命じている。

この頃、宮下欽次郎は、同年7月24日（1864年8月25日）、御警衛方御番士に任じられ、このような激動の大坂へ上洛することになったと思われる。宮下欽次郎が大坂で勤務の間、どうしていたのかは不明。その後、『信濃国松代真田家中依田家文書』の「幸教公御上京御供日記」によれば、松代藩は、翌元治2年2月22日（1865年3月19日）に大坂を出立し、松代に同年3月5日（1865年3月31日）に帰着した。大坂を出立しておよそ12日で松代に着いたようだ。慶応元年5月21日（1865年6月14日）、宮下欽次郎は御警衛方御番を解かれ、二番へ帰番している。

この間の松代藩では、文久2年（1862年）に公武合体派の恩田党の家老、恩田頼母が亡くなって、真田党の真田志摩（桜山）が家老として復職し、藩内は勤王派で統一される。文久3年（1863年）、将軍徳川家茂の上洛に際し松代藩が将軍留守中の横浜港警備を命じられると、藩内では病弱な藩主幸教の隠居が議論されるようになった。そこではじめ下野佐野藩主堀田正衡の七男、智七郎を仮養子として届け出、その後、養子候補として日向高鍋藩主秋月種任の三男、政太郎と肥後熊本藩主細川斉護の三男、澄之助の名も上がるが、結局、伊予宇和島藩主伊達宗城の長男、伊達幸民が幸教の養嗣子に迎えられることになった。

慶応2年3月9日（1866年4月23日）、藩主幸教は幸民に家督を譲って隠居する。翌10日（1866年4月24日）、幕府より京都御所の遡平門の警備を命じられ、このため藩主、幸民自ら士卒を引率して上京し、警備を5ヶ月間担当した後、に激動で揺れる京都の日夜の状況をつぶさに観察した。そして同年9月26日（1866年11月3日）に警備を免じられ、藩兵全員を指揮して悉く松代へ帰藩した。

（森重和雄）